重文札幌農学校第2農場農機類標本台帳

一般名称: 馬橇、	現地の通称: 北海道型馬橇、柴巻ソリ

資料種別: ◉ 製品-実物 ○ 製品-レプリカ ○ 製品-模型 ○ 製品図面 ○ 写真等 ○ 図書掲載 ○ その他

資料種類:				
	☐ 人力用具	☐ 手押式	☐ 耕耘用	☐ 調製用
	☒ 畜力用具	☐ 乗用式	☐ 施肥播種	☐ 施設類
	☐ 原動機具	☒ 牽引式	☐ 管理用	☐ 機素
	☐ トラクタ具	☐ 定置式	☐ 収穫用	☒ その他

管理プレートNo.

台帳No.

相手先番号等

配置位置メモ

脱穀室120

製作者・会社: （北海道車橇業組合会員企業か） 製造市・国名

製造年_購入年,標本収集年: 1935年前後か、農場で購入、屋外放置物を1975年標本化

使用目的・使用方法等

馬で牽引して雪上で荷・人を運ぶ、
雪上運搬のソリは、明治維新前には手押式のみと言われ、通常は人が背負うか、馬の駄鞍に積む方法であった。開拓使は、道がなくとも冬季の開拓地の交通・開墾作業が進むように、1875年に開拓使樺太支所にロシヤ型ソリ（人用と荷積用、人用は述べない）の購入と職工３人の雇用を依頼し、開拓使工業局で製造を始めた。1878年から10余名の職工を追加して生産を本格化させ、遂に鉄道開通前に札幌～手宮間を夏は馬車、冬は馬橇で陸運事業を営むに至った。

利用経過_収集記録_意義等

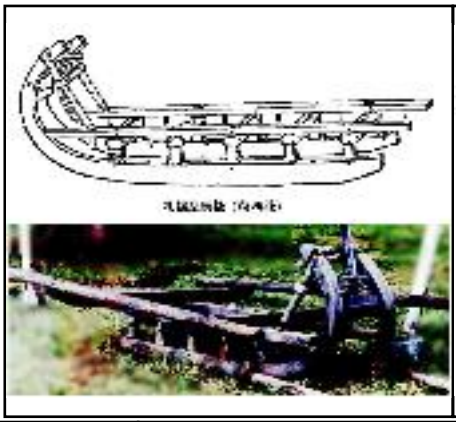
ロシヤ式橇の滑走面となる楢材の敷木または台木は、前面で大きく湾曲させる必要があり、セイロで蒸気蒸して型に合わせて曲げる技術は画期的な手法であったから、函館七重官園や青森県から研修生を受け入れたし、開拓使の解散で製造が民間に移ったため、ソリは各地に広まり、地域の要請に応じて形態が多様化した。発売順に形式を示すと、1890年頃に札幌型、これを応用して青森型、さらに青森型を改良して函館型へ移っている。1930年頃の全道の馬ソリは、道南と根室地区に集中して普及した函館型25%、そも他に普及した札幌型75%だった。

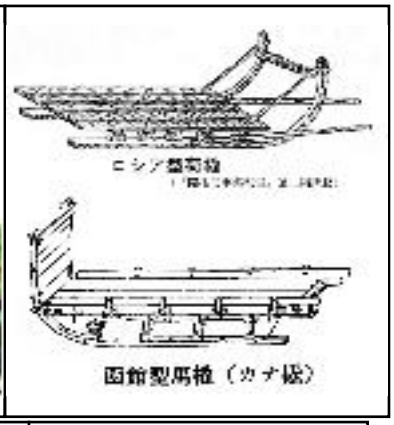
仕様書_解説等

右に全体図

札幌型ソリ、別名柴巻型ソリ
全長（除曳木）：８尺５寸、全幅：２尺３寸または２尺５寸。敷木：幅３寸ｘ厚さ４寸５分（鼻：湾曲部２寸５分）、床高さ１尺３寸。敷木は左右並行でなく、下がわずか広くて安定性を高めている。

右中のカラー写真：標本の展示風景
下１番目写真：標本の俯瞰写真
２番目写真：乾草ニオの冬季搬入





外観特色関連図等

資料の所在

収穫調製室

資料管理経過

ソリの鼻にある「手綱掛け」は、特殊な形態をして好事家が注目している

作業メモ・追記文

文献：北海道開拓記念館調査報告、10号：1975、12号1976、16号1978に掲載の関秀志論文
北海道開拓記念館研究年報、7号：1979、8号1980に掲載の関秀志論文

台帳管理番号 S721